

## 共同研究プロジェクト「＜人文学の討議空間＞のデザイン」について Joint Research Project: "Design of <the Place for Discussion of Humanities>"

加藤 謙介<sup>†</sup>  
Kensuke Kato

久保田 美生<sup>†</sup>  
Mio Kubota

森 宣雄<sup>‡</sup>  
Yoshio Mori

本研究では、異分野コミュニケーションの実践事例として、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の若手研究メンバーによる共同プロジェクト「＜人文学の討議空間＞のデザイン」について報告する。具体的には、異なる専門性を持つ研究者の討議場面のデザイン、及びツールの活用の実践事例を紹介する。その上で、それらデザイン、ツールの意義について論じ、今後の展望を述べる。

### 1. 問題：インターフェイスの人文学

人文学的な知は、汎用性の高い客観的な法則の確立を目指す自然科学と異なり、一回的な経験の独自性ととも、地域性・時代性、作家／作品性、人間の創造性を重視する傾向にある[1]。専門分野（ディシプリン）が取り扱う事象の個別性・特殊性、及びそこから生み出される知の独自性に関心が向けられることは、同時に、学問研究の「縦割り」の制度化を導き、細分化された各専門を越えた知を生み出しにくくなっている。

一方で、現代社会が直面する課題（科学技術、歴史問題、民族問題、医療・介護問題等）は、さまざまな文化・民族・国家のあいだ、専門家と一般市民（非専門家）の間、「官」と「民」の間等、＜インターフェイス＞の問題として立ち現れている。＜インターフェイス＞（interface）は、一般には技術系の用語として用いられ、「機器や装置が他の機器や装置などと交信し、制御を行う接続部分のこと」とされている[2]。しかし、その語義には、「異質なものがたがいにその界面（＝顔）をふれあわせる出来事、あるいはその場面」[3]が含まれる。

本来ならば、人文学は、上記のさまざまな社会問題に対する知見の蓄積を進めてきたはずである。しかし、先に述べた「縦割り」の制度化に加え、専門分化が進んだ結果、専門家ではない人々に対して、その知を伝えることが困難な状況ともなっている。このような、現代社会、及び人文学の現状に対して、＜インターフェイス＞の視点をもって対峙しようとするのが、大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」の主旨である。

この＜インターフェイス＞の 2 つの軸として、＜横断的な知（横断性）＞と＜臨床的な知（臨床性）＞が設定されている[3]。＜横断的な知＞とは、「異なる複数文化のあいだの接触や交叉や軋轢を国家・地域横断的にとらえてゆくもの」とされている。一方、＜臨床的な知＞とは、「文化の諸次元、とりわけ研究者と問題発生現場、専門家と一般市民とを架橋してゆくもの」と定義づけられている。つまり、本 COE では、既存のディシプリンの枠組み、及び、専門家／非専門家の境界、この 2 種類の＜インターフェイス＞について探求する試みがなされている。

本プロジェクトは、こうした背景を踏まえ、人文学内の

異分野研究者の集まりである「若手研究集合」（後述）内の通じ合えなさ自体に焦点を当てた [1]。その際、安易な「共通理解」ではなく、人文学的知の特色でもある各専門の個別性・差異を活かしたまま議論を促進できるような討議の場をデザインすることが課題となった。

異なるディシプリンの専門家同士が、あえて共通テーマを設定せずに議論しあう場面は、単に異分野の境界を越える「横断性」が問われるだけでなく、お互いが専門家でありかつ非専門家でもある「臨床」の場ともなる。本研究では、2 つの＜インターフェイス＞を同時に問題とし、かつ各ディシプリンの多様性を保持したまま、討議の場をデザインするための方法論の開発・ツールの活用の検討を目的として、実践／研究を行った。

### 2. 事例：「若手研究集合」と「＜人文学の討議空間＞のデザイン」

#### 2.1 経緯

「若手研究集合」は、2004 年 4 月に編成され、現在も活動を継続している。2004 年 4 月、「インターフェイスの人文学」に参加する若手研究者（特任助手・特任研究員・RA 他）、及び、研究推進のためのメディア利用・開発・提案等を担当する「メディア・ラボ」のスタッフが一堂に集められた。その際、プロジェクトリーダーが発した「人文学にとっての全く新しい問いを発見せよ」とのミッションのもと、「若手研究集合」が編成された。

当初、研究会では、各メンバーの自己紹介を兼ねた研究発表などが企画されたが、円滑なディスカッションが行われたわけではなかった。ある分野での「常識」が研究会の場では通じない、「面白さ」が伝わらない、議論がかみ合わない等、各メンバーの専門性の差異が顕著に現れ、文字通り「議論にならない」ことがしばしばあった。

2005 年に入り、研究会の今後の方針が検討された。メンバー内で何らかの共通テーマを設定し、個別研究プロジェクトを実施する案も出された。しかし、「この研究会でしかできないことは何か」を議論する中で、若手研究集合が、広く人文学を専門にしているという以外には何の共通性も持たない研究者が集まる討議の場である、という特徴が目された。その結果、「共同研究の場そのものを共同研究する」プロジェクトである「＜人文学の討議空間＞のデザイン」が立案・実施されることとなった。

#### 2.2 「ツール」と「デザイン」

本プロジェクトは、2005 年 10 月から 12 月までに開催された計 6 回の研究会が主たる内容となる。研究会は隔週 1 回・約 3 時間行われた。この研究会には、筆者らを含め「若手研究集合」のメンバーである特任助手・特任研究員・RA、及び、「メディア・ラボ」スタッフの計 18 名参加した。各参加者の専門分野と人数は次の通りである。フランス文学：1 名、哲学：1 名、東洋史学：2 名、日本学：2 名、社会学：1 名、人類学：3 名、言語学：2 名、美

<sup>†</sup> 大阪大学

<sup>‡</sup> 英知大学

学：2名、心理学：1名、「メディア・ラボ」スタッフ：3名。

「ツール」と「デザイン」：本プロジェクトを進めるにあたって、6点の「ツール」が採用され、各々の使用方法がデザインされた。

- **ディスカッションペーパー (DP)**：研究会の主な内容は、メンバーによって執筆されたディスカッションペーパー (DP) の検討であった。各回 2～3 名のメンバーが担当し、事前に DP を提出した。DP は、学術論文としては未完成ではあるが、それゆえに、異分野の研究者同士が討議を行う余地が生まれるという特徴がある。DP の内容については、本 COE の 2 つの軸である「臨床性」「横断性」を、自身の研究に関連付けて論じることのみが条件とされた。執筆者以外のメンバーは、研究会前にコメントを送ることが課せられた。
- **メーリングリスト**：DP の提出、及び事前のコメント提出にはメーリングリストが活用された。
- **討議支援マップ**：議論の進行を促し、内容を可視化するため、ディスカッションの中で「キーワード」（専門用語、概念、印象・感想）が出される度に付箋紙に記し、模造紙に貼付した。また、キーワードどうしが接続され、議論の流れについて説明が加えられることもあった (Figure 1)。

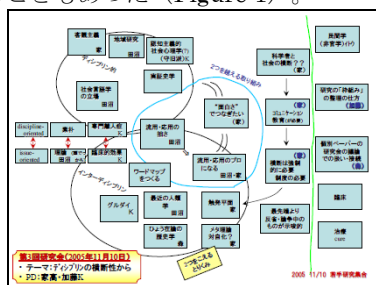


Figure 1 討議支援マップの例

- **議事録**：研究会中には、発言内容をパソコンを用いて同時進行で記録し、プロジェクターで投影しつつ、議論を行った。参加者は、投影された発言内容を参照しつつ、議論を進めた。
- **記録**：研究会での議論内容は、ビデオカメラ、デジタルカメラ等が用いられ、音声・画像・動画として記録された。
- **各回の要旨**：各回の研究会の冒頭には前回の議論内容の要約 (1000 字程度) が配布され、簡単なふりかえりが行われた。

### 2.3 プロジェクトの実践

6 回の研究会では、14 本の DP が検討された。DP の内容は多岐に渡ったが、研究会内での議論にはいくつかの特徴が見られた。ここでは 3 点列挙する。

- (1) これまでの議論では、当該テーマに関する知識を持つ人が議論の中心となったが、個別の専門を持つ参加者各人の発言が「討議支援マップ」に貼付されることで、討議に際して多様な見解・解釈が可視化されることとなった。特に、討議の中心が、「発言者」から「マップ」そのものへと変化することが見られた。
- (2) 通常の研究会では取り上げられない事柄 (例えば、ペーパーに「学者言葉」を使わないことの妥当性) が議論

の焦点になることがあった。こうした葛藤は、各メンバーの専門における暗黙の前提を顕在化させるとともに、これまで積極的に検討されてこなかった「問い」の萌芽を「討議支援マップ」上に残すこととなった。

(3) 様々な葛藤が生じたにもかかわらず、参加者は、本研プロジェクトに対して高い評価を与えた。異分野の DP やそれに基づく議論が「『私にも、他の人文学の専門分野の人びとにも関係のあることだ』と思える」[4]ようになった、との感想が聞かれた。

本プロジェクトの討議に供された DP は、執筆者の責任において改訂され、2005 年度若手研究集合報告書として刊行された [5]。

### 3. 考察：＜人文学の討議空間＞のデザインの意義と課題

「＜人文学の討議空間＞のデザイン」は、多様な専門を持つ参加者たちとの討議において、あえて共通性を設定せず、かつ討議を促進するような道具立てを行うことで、各ディシプリンが直接対峙・対話するような場を設定することができた試みであった。これには、以下のような意義があったと考えられる。

本プロジェクトでは、様々な「ツール」(DP、討議支援マップ等)が、メンバーの専門分野をつなぐ＜インターフェイス＞として機能した。これらのツール及びそのデザインは、個人で研究を進め、その「成果」をもって討議を行う人文学のスタイルにおいて、研究を行う「プロセス」を共有する場をもたらしたと考えられる。上述した自他のディシプリンの問い直しや「新たな問い」の萌芽は、本プロジェクトの一定の成果と言えるだろう。

本研究は、ともすれば「ツールの開発・試行とその成果」と見えがちだが、むしろ、このような場をデザインしようとした試み自体が、さまざまなツールを生み出したと言える。この意味で、ここで試されたツールは、プロジェクトの「成果」の 1 つであるとも言えよう。

現在、「若手研究集合」は、最終的なアウトプットに向けて「新たな問い」の洗練を行っている。本プロジェクトでの方法論を踏まえ、異質なディシプリンの集合から「新たな問い」を生み出す討議空間のデザインは、今後の課題として残されている。

### 引用文献

- [1] 森 宣雄. 共同研究プロジェクト「＜人文学の討議空間＞の創造とデザイン」における本報告書の位置. <若手研究集合>報告書編集委員会 編 2005 年度<若手研究集合>報告書. 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」. 5-16. 2006.
- [2] 新村 出 編. 広辞苑第四版. 岩波書店. 199. 1991.
- [3] 鷺田清一. <インターフェイスの人文学>というプロジェクト. 大阪大学 21 世紀プログラム「インターフェイスの人文学」編 2002・2003 年度報告書 1. 岐路に立つ人文科学. 7-13. 2003.
- [4] 田沼幸子. ふたつの研究会をめぐるエスノグラフィック・ノート：アイロニーを超える力. <若手研究集合>報告書編集委員会 編 2005 年度<若手研究集合>報告書. 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」. 215-224. 2006.
- [5] <若手研究集合>報告書編集委員会 編 2005 年度<若手研究集合>報告書. 大阪大学 21 世紀 COE プログラム「インターフェイスの人文学」. 2006.